

翻刻『雪梅芳譚犬の草紙』(十二)

凡例

一、「翻刻『雪梅芳譚犬の草紙』(十二)」（『京都光華女子大学 研究紀要』第五十号、平成二十四年十二月）の後を承けて、京都光華女子大学図書館蔵『雪梅芳譚犬の草紙』の「七編上」を、図版を掲げつつ翻刻する。合巻『雪梅芳譚犬の草紙』については、「初編上」の翻刻を掲載した『光華日本文学』第十二号の「凡例」を参照いただきたい。

一、翻刻の方針のみあらためて掲出する。

- 1、図版は各丁見開きを一面とし、丁付けにより「一ウ、二オ」のように示す。
- 2、本文翻刻は、やはり「一ウー二オ」のように冠し、改行位置は／で示し、丁移りは「」で示すが、書入れについては丁付けにこだわらない。
- 3、一面が二枚の絵組から成る場合、翻刻の方のみ半丁ごとに分離する。
- 4、原文はできる限りそのままとするが、漢字仮名とも、異体字、略体字は現行のものに改めた。

5、読みやすくするため、句読点を補い（ただし、序文の句点は原文のままとし、その旨を断わった）、会話文については「」を、会話中の会話文には「」を補った。原文にある「」は『に改めた（原文の「あるいは『は、』とした。さらに仮名を適宜、漢字に置き換え、その場合もとの仮名をルビに移した。

6、原文の振り仮名は、右と区別するために（ ）に入れた。ただし、袋・表紙および序文等、一部原文のままの振り仮名に（ ）をつけなかったところがある。その場合は、その旨を断わった。

7、書入れは本文のあとへ一段下げて、文意の通り易い順に記した。

8、本文中にある読み進めるための合印については、すべて●で統一した。

9、「初編下」に至って出てきた、本文中の○（段落を改める意識で使用されている模様）は、その位置にそのまま翻刻した。

一、末尾に、前号までに倣って、「七編上」に出るもののみながら、登場人物名（まれに地名もある）と、元の読本『南総里見八犬伝』の相当する名称との対照表を付した。

肥留川 嘉子
隅田 三鈴



図版1 七編八編改装表紙



図版2 七編袋 (色刷) 七編上原表紙 (色刷)

〔袋〕

雪梅芳譚／いぬの／さう／し

第／七／編

仙果鈔録／豊國画圖

中橋紅英堂發兌

松陽女史

〔原表紙〕

雪梅芳譚／一名八犬傳 犬の草紙

葛吉板

七編上

〔原表紙見返し〕

雪梅芳譚／七編 上冊

仙果鈔録／豊國画

松岡氏の梅品は／めづらしき書にも／あらず。すでに六編／の紙帙にも出せ／しが、八房の話に／よりにて又八梅を／こゝに写せり。

酉春

紅英／堂／梓

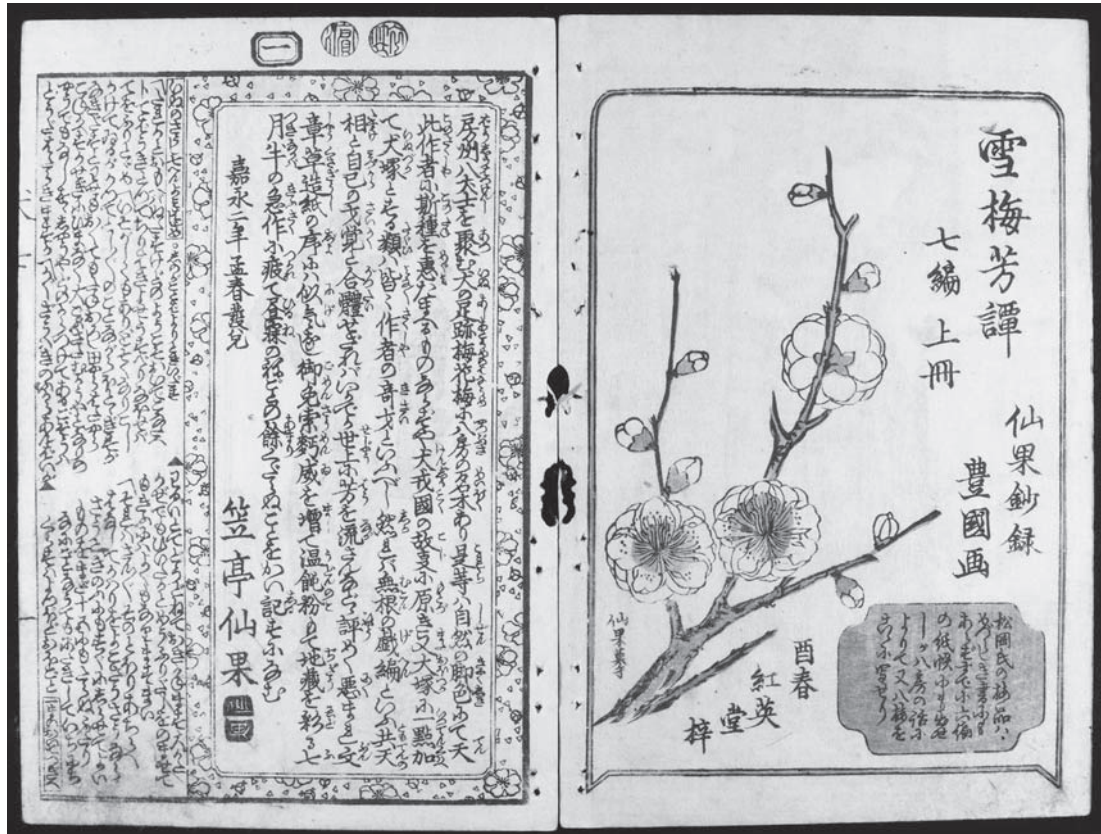
仙果摹

〔一才〕

(翻刻七行目まで振り仮名は原文のまま)

一

房州八犬士を聚む、犬の足跡梅花、梅に八房の名木あり。是等は自然の脚色にて、天／此作者に斯種を恵たまへるものならずや。犬戎國の故事に原き、又大塚に一點加／て犬塚とする類は、皆々作者の奇才といふべし。然



図版3 原表紙見返し(色刷)、一オ

れば無根の戯編といふ共、天／相と自己の才覚と合體せざれば、いかでか世上に芳を流さんなど、評めく悪まれ文／章、草造紙の序には似気なし。御免索麴威を増て、温飩粉もて地蔵を彩る、七／月半の急作に疲て、昼寝のねごとの餘くだらぬことをかい記すになむ。

嘉永二年孟春發兌 笠亭仙果

犬の草紙七編読み始め ○篠兎が言葉より説き出だす。／誰かと思へば沼田助殿、ようこそ御出で、此方へ／ト手箒取つて塵掃き寄せ、薄縁直せば／手を振り止め、『忙しくもあり土足なり、腰／掛けて居るが勝手。年々／のことながら不如婦が／鳴き出すと、早稲も晩稲も種下ろし、田やら畑やら／捏ね返す稼ぎに暇なく大御無沙汰、向うや隣の／やうでもなし。を、庄屋殿から付けてある小僧は／如何だ、働きますか』『岳藏は昨日から按配が●●悪いとて、どうと寝て起きかねます。大方／風邪でもひいたかと妙振出しの飲ませて／も、急には良くもなりますまい』『それは散々。その通り彼方へ／話して代はりを寄越さう。さうなら／さうと昨日にもすぐ知らせてよい／ものを、まだ十五にも足らぬ二人、／何事なうても煮炊きして一日／暮らすは余つ程大事。一枚おいて次へ

〔一ウー二オ〕

(振り仮名は原文のまま)

清人笠翁いはく、昔人の女子に歌舞ををしふるは、物いひとしなかつち、うつくしくじんしやう／にさすべきためにて、あながちにうたはせまはせて人にみせ、藝をほこる為ならずと。今はたゞ／親よりしてカブキ者同様に、深き窓にかくすべき子のかほをさらして、ともすればうき名の／たつ種をまく。かの茶湯といふ事の行儀しつけの誨にならで、食事と道具の奢にのみおち／いりたるとひとしといふべし。これらの伎を学たまふをさな子たちにつげまうす。その本のころをわすれず、／遊藝にはふかいりをなしたまふなど、詩か発句かくべきところすこしばかり。

青地鱧二郎

武蔵大須／賀村に／流浪來り

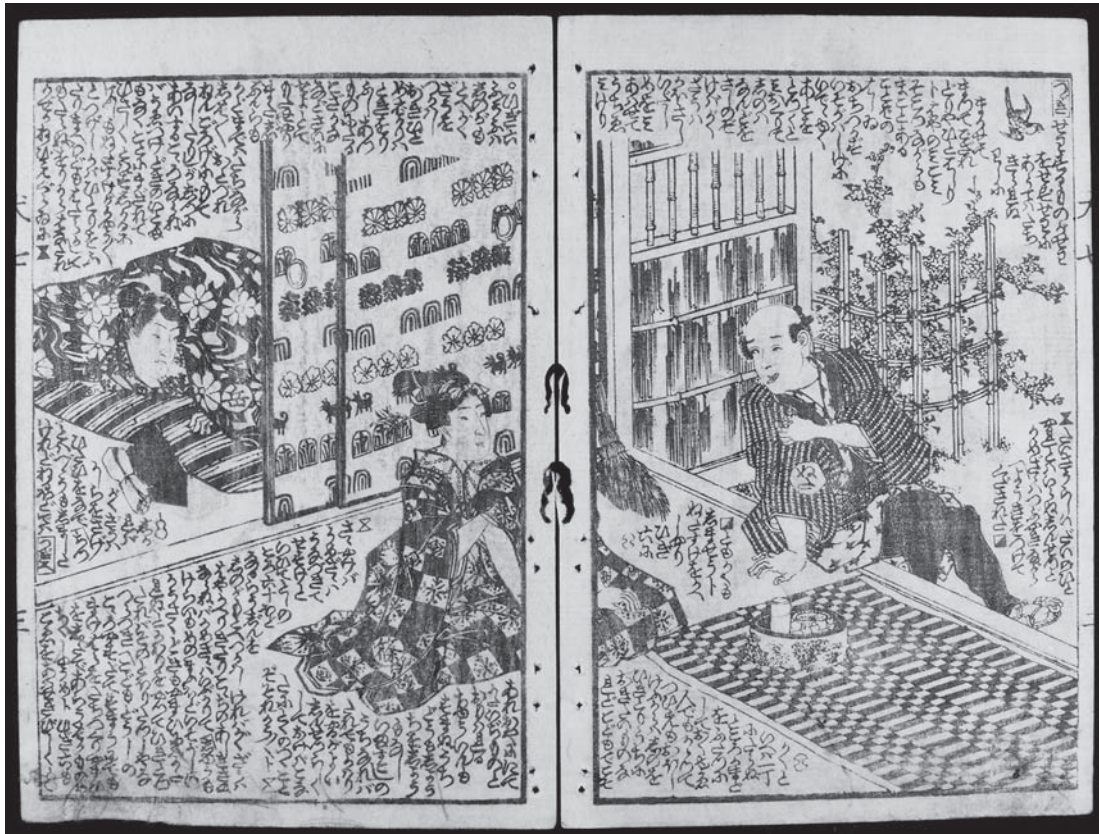


図版4 一ウ、二オ

地方の女兒に歌舞を指南の圖
かつら箱

〔二ウー三オ〕

つき世話する者が世話をせず、世話に／あうては立ち／切られぬ。私に／任せて／待つてござれ。／どりや一走り／ト早飲み込み、／粗忽ながらも／実ある／言葉の／端居／落ち着かず、／忙はしげに／出で、行く。／後を／篤と／見送りて／篠兎は／納戸を／差し覗／けば、／岳／藏は／顔差し／出だし／目を見／合はせて／打ち笑／みけり。○非義六／夫婦は／篠兎がも／とへ岳／藏を／遣はし／置き、／人／目ばかりは／時折／節あつもの煮たる／小魚／など菜に／せよとて／持たせ遣り、／また自分等も／門までは立ちながら／しば／訪れ／懇ろげにもて／なしたりしが、／実に／愛する心ならね／ば、／植ゑ付け時の暇／もなく事に紛れて／久しく訪はず。しかるに／今日しも沼田助が斯様／と告げしかば、「一人をふ／たり前ほど働かして／も足らぬ折から、／鼻垂れ／風邪か寝冷えぐらるるに●」●大層らしい。代の人／遣れとは要らぬ親切」と／瓶さ、は眩きながら／『よう気をつけて／下された。●●ともかくも／しませう』ト／沼田助を帰／し遣り／非義／六に●●斯くと／言へば、「一丁に足らぬ／ところ、／籠／を二つに／しておく故、／人手もかゝつて／費えも多し。／今日からは篠兎を／引き取り、／家に／置きたいものなれど、子供でこそ」あれ親に似て／片意地者と／思はれる。／中陰も／済まぬ内／如何も承／知をしよう／もなし。／今少しの／内なれば、／誰でも代はりを遣るがよい。／親切らしく／しておけば、／こなたに得の付くことぞ。それから／ト●●囁けば、／瓶さ、は／頷きて／溜すけと／いひて年の／頃六十ほど／なる老人を／篠兎が元／遣はしければ、／岳藏は／はや帰り来り、／心地の悪しき様／ならねば瓶さ、は訝りて、『主も／家来も目の舞ふほど忙しい／耕作時も病には勝た／れぬと、代はりを遣つて引き取つたれば、その通り達者な／面つき』『子供同士の／心安立て、相撲にでも／負け腹を立ち、作り病／をしたであらう。馬鹿者め、／畜生め』ト非義六も／声を合はせ、厳しく●●叱れば／岳藏は／頭を下げ、



図版5 ニウ、三オ

額を撫で「此」とは頭痛もしました／けれど、寝るほどでは「つきへ」

〔三ウー四オ〕

つきへござりませず。さア斯うばかり申してはいよくお叱り／なされうが、私彼方へ参つてから彼此余程の／日数は経てど、初めから若旦那氣遣ひらしい顔を／して「水を汲みましょ」「いや止しやれ」／「米を浸しましょ」「いや止しやれ。俺が汲んで俺が研ぐ。人にさせるは嫌ひぢや」／と如何もあぢいなあの／子の仕向け。この長い／日に朝から晩／まで毎日／／睨め競、精／も根気も尽き／果てました。寝る／と起きるが苦に／なつて朝寝をし／ても起こされず。起き／そびれては昼まで寝て／身が楽過ぎて困り／きり思ひついたる作り／病、一生涯の知恵を／ふるつてやつとお家、帰りました。／どのやうな骨折りで急／命でも厭ひませぬ、犬須賀／様への奉公は些との／間も御免なされて下さり／ませ」と手を擦り／／真しやかに／欺けば、夫婦は聞いて顔／見合はせ「瓶ぎ、は何とおも／やる。十や二の小僧さへ用心して」出、行けかしに持て成したる篠兎が胸／その由なしとは思はれぬ。隔て／がましき仕打ちがあらば、作／病して寝て居る手間で／そつと知らせに來れば／よい。病んだ顔して出、／来るが一生の知恵／ならば、三文の値打ちも／ない」ト罵れば、瓶／ぎ、微笑み「住みにく／かつたも無理でなし。／年こそゆかね執／心深く、篠兎は腹／の悪い奴。手にもあ／しにもうかとは乗ら／ぬ。何事にもあれ／彼方に居て聞いた／こののあるならば、／岳藏隠さず／話して聞かしや。／私ら夫婦を仇のやうに／篠兎は思うて／ゐるであらう。どの／やうな按配ぞ」ト問へば、岳藏／頭を振り、／「偶／物を／言ひかけても心／持ちようお返事も●」●なさらぬほどの若旦那、何／ひとつ仰らねど、昔はむ／かし今は今、伯母御の他に／力にする人はないと問はず語／り。強ちに悪い心を／持つては定めてござるまい。／私をお嫌ひなさるは／氣性の合はぬか、前の／世の仇でがな／ござりませう」ト言へば非義六顔を和らげ、／「二季居の奉公人でも相／性を見ることなれど仮病／したのは不出来だ。酷く折／檻する奴なれど、今度は／目を眠つておく。●●その代はりこの時節、百人前も働き／をれ。のらかわいた



図版6 三ウ、四オ

らその時こそ容赦は「せぬ」ト叱り退け、後に二人は猶さ、やき、「岳藏が篠兎に嫌はれしは、気の合はぬのみならず、憎まれ口の過ぎたるか。その上にも篠兎が心に「隠し目付に岳藏を付けたるならん」と推量して更に心を許さぬならん。代はりに遣りし滯すけをも同じやうに疎くなさば、いよ／＼此方を疑ふなり。またあの親父にさもなくば、此方に／＼かゝることは「あらじ」とそれより二日三日を／＼経て瓶ざ、みづ／＼から篠兎を訪ね、半日ばかり彼処に居て篠兎と滯すけが様子を見るに、篠兎は滯すけに万事を任せ、滯すけもまた忠実やかに立ち居振る舞ふ様なれば、大方疑ひ解けながら猶其処此処に心を付け、家に帰りて斯くと告ぐれば、非義六は「さもあらん。さりとして篠兎は世の常の童ならねば、あ／＼からさまに未だ肌膚は許しがたし。まづ岳藏を呼び寄せて、斯様／＼に言ひた／＼まへ。その上は斯う／＼ト示し合はする折／＼からに、竹簀の子を犇／＼鳴らして障／＼子の彼方を行く者あり。『其処へ行く／＼のは岳藏か。内／＼の／＼話がある、此方へはいれ』ト呼び止めて膝の辺へ招き寄せ、『夫婦揃うて仰／＼しく言ふほどのことでもないが、折がよければ／＼呼び寄せた。知りやる通り紛れもなき、俺の爲には篠兎は甥なれども、父の癖みを受け継ぎ、手前も知つたあの根性。あくまでに可愛がる伯母を不足に思はぬならば、煮焼きの世話に付けおくる者、選り嫌ひはよもせまじ。定／＼めし其方が口悪く篠兎に腹を立、せたらう。』

つぎへ

〔四ウー五オ〕

つぎそれは／＼ともあれ／＼かくもあれ、世間しう／＼のかし／＼ましさに良／＼くも悪／＼くもあの子のことは私／＼から言ひ／＼にくい。たゞ揚げ足を取られぬ用心／＼するより他に仕方はなし。手前は六ツか七ツから一生／＼使ふ小僧なれば、甥にも増して不便に思ふ。主／＼人の恩を恩と思はゞ、も一度あち／＼らへ立ち帰り、どれほど素気／＼なく／＼当たる／＼とも根気を／＼尽くさば彼も負け、心の底を明かすで／＼あらう。聞いたらそつと耳に入れよ。篠兎を此方へ呼び取りて養ふ月日は長いこと。今言うたこと小耳に挟んで



図版7 四ウ、五オ

主人の為になるならば、利生はきつとあると知れ。合点がいたか」ト言ひ聞かすれば、非義六は毛抜きを拭ひ、顎掻き撫で、言葉を継ぎ、「岳藏、其方は幸せ者。これほどの内証を打ち明けるは瓶ざ、も甥にも増してその方を実の子とも思ふ故。さればまた其方を遣つて滯すけ爺いと取り替へよう。もちつとの間だ、辛抱せい」ト言へば、岳藏小膝を擦り「これほどにわたくしを思つて下さる御厚恩、忘れることではござりませぬ。●何時ぞやも申した通り、若旦那が悪い気を持たつしやらう道理はなけれど、ともかくもして馴れ近づき此方の御為に悪いこと聞いたら、すぐに申ませう。嫌なことだが●●●お主へ忠義。どりや行きませう」ト立んとすれば、瓶ざ、●●●「暫し」と押し止め、●●●「なんぼ子供同士でも、まさか一人は遣られまい。私が連れて行きませう」ト帯締め直せば、岳藏は庭に駒下駄つきそへ、下りれば裾の塵打ち、払ひ、供して彼処へ赴きつ。瓶ざ、頻りに笑顔をつくり、「用がなければとんと来ず。昨日今日の道の近さ。何しに来たと思やらう。今日はこの小僧めがことでまた参りました。何か其方の気に入らず、「用を言ひつけくれぬのが切ない」とて仮病を起こし帰つた」と我等へ話し、さう聞いでは気が済まず。昔は●●●とまれ親身の伯母甥。親しき仲を小丁稚に水を差されて白飯に咲、麦が混じつたやうに、奥歯に物が挟まつては心掛、りと非義六殿も「何故帰つた」と大腹立ち。岳藏は酷く●●●叱られ、後悔して「若旦那に詫びして賜べ」と泣きつく故、よう言ひ聞かせて●●●連れて来た。とても気には入るまいが、遠慮なく叱り懲らし、酔にも味噌にも●●●使ってくれ、ば、あれも幸せ。私も安堵。岳藏来い」ト呼び立てられ、後ろより怖づく、這ひ入り、「御新造様の仰る通り、心に物はなけれども、何にも使つて下されぬに困り果てた空病。御免なされて下さりませ」とつぎへ

〔五ウ〕

つぎひたすら詫ぶれば篠兎は驚き、／＼とて／＼思ひもよら



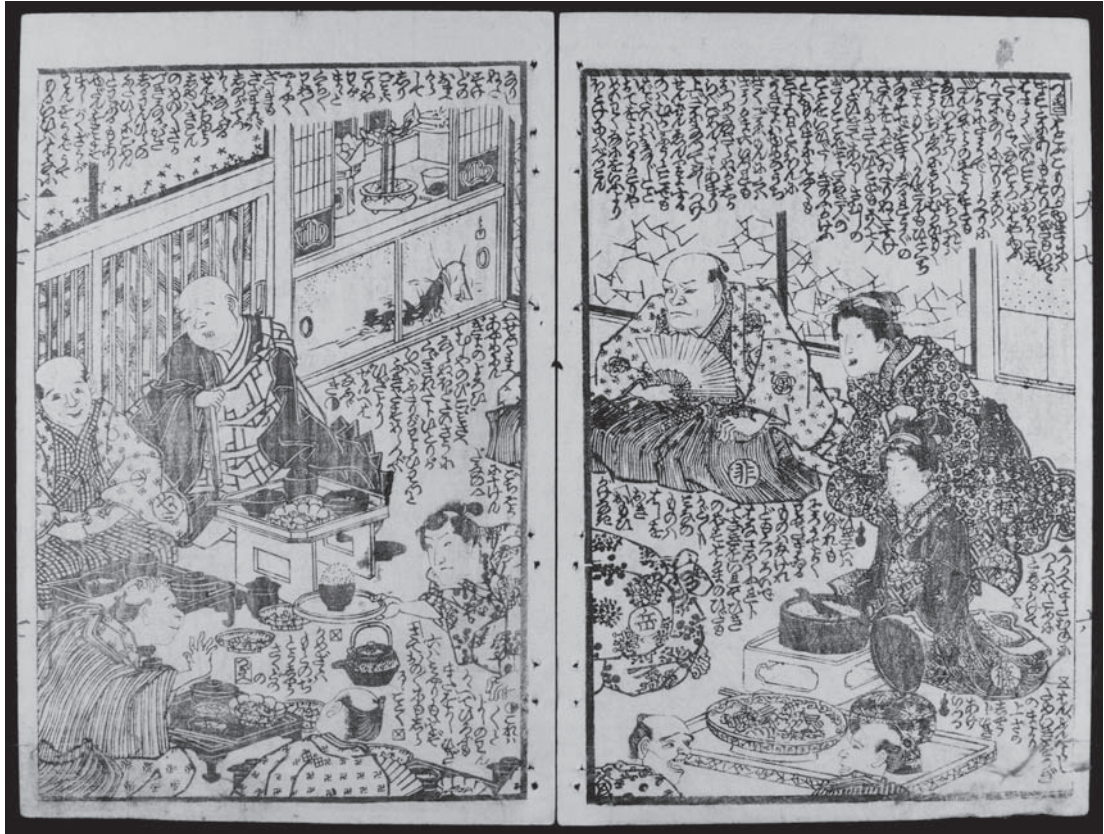
図版 8 五ウ、六オ

ぬこと。父存／生の時よりして釜／元は私が引き受けて賄う／
 たれば、手前で●●するが自由の良さに「止しやれ」と申したを悪う
 とつたは思ひ過ぐし。伯母様達のお耳にも入れてお世話／かけたのは、
 私がやつぱり咎。御免なされ／て下されませ」ト他事なく見ゆるに、瓶ざ
 へは微笑み、『さう聞けばいよく安堵。仲直りの上からは元の通りに
 岳藏を置いて／溜すけを連れて行かう。さて思み明きまでこのやうに二軒
 で暮らすは実に不便利。五七日の法事を済まし其方を家へ入れ／たいと思
 ふが、何と思やるぞ。いやか、如何／ぢや』ト問ひければ、篠兎は密かに吐
 息を／つぎ、『荒ら家なれど住み慣れし家と思へば／名残は尽きねど、四十
 九日が百日でもその期にならば残り惜しく、一つことござりませう。と
 も／かくも計らひ給へ』ト言へば瓶ざ、ます／喜び、『よう聞、分けた
 愛い子ぞや。五七日の御建夜には近所／隣の人を招き、志の物を振る舞
 ひ、次の日は此処を仕舞ひ、私が方へ移るがよい。破魔児はをん／な、
 話する相手にはならずとも、妹とも女／房とも心を隔てず遊んでた
 も』ト一人喋つて／打ち笑へど、篠兎は呆れて物言はず。『三十五日も
 う／四五日。明日から連夜の支度でもせずはなるまい。忙／がしや、岳藏か
 のこと忘れるな。溜すけめは／何処に居る。私が供して帰るのぢや、溜すけ
 く』ト呼ばはれば、「ハイ／、此処に居ります」ト、ゆる／／厨
 の障子を開ければ、『この親爺の／落ちつき顔、早う門へ出かけるのだ
 よ』ト／急がし立て、供に連れ、「煮端の白湯も／できました。もう暫
 く』と二の巻へ

□□□／拾人前
 吸物膳／十人前

二
 一六オ

一の巻つゞき 止むれども、『茶を飲んでゐる暇もなし。／竈の薪一本も
 人任せでは損多し。また／来ませう』と急ぎける。○岳藏辺りに心を付け、
 門の戸をしつかと閉め、元の所に／座を占めて非義六夫婦が言ひし／こ



図版9 六ウ、七オ

と、また我が答へしことなんど／余さす細かに物語れば、篠兎は頻りに打ち嘆き、「我別に悪／心なけれど、とにかく／人に疑はれ仇かた／きと思はれては、彼処に／移りて長の月日如何にして／送らるべき」ト言ふを岳藏慰めて、「伯母夫婦は欲に眩み、利に／迷ふの他なければ、その心をだに／飲み込めば、身の災ひも避け易し。／何処までもこの莊助、御身と仲を悪く／見せなば、二人はいよく／某が言ふことは信ずべし。さらば良きこと悪しき／こと、我が耳に早く入るべし。／三人張りの強弓も久しく張れば緩む慣らひ。此方の／心に実を尽くし弱きをもて強きを／受けなば、伯母御の邪見の角も折れ、慈悲ある／人、なられもせん。ともかくに身を投げかけ、その／成り行きを見給へかし。此処にて物を思ふとも／その場の役には立ち難し。心狭し」と諫むれば、●篠兎は忽ち惑ひを解き、「この身を／伯母に任すること、元來父の遺言なり。／善悪は運に任せん。彼処へ移れば／このやうに胸の機密を／細かには語らふことも難からん。御身は／一人の／兄なれど／知恵才／覚は抜群／なり。教へ／あらば、示し／給へ」ト言へば／岳藏頭を／撫で、「我が才／如何で／御身に及ばん。／こはたゞ／岡目八目／なり。されども／心もちか／らも尽くして、／密かに御身が／盾とならん」ト猶様／ぐに囁く様、／更に童と見えざりけり。○さる程に、／警作が三十五日の連夜になりぬ。瓶／ざ、等は昨日より汁や膾のこし／らへして、椀家具までも母屋より

〔六ウー七オ〕

つゞき運ぶ小者が行き来には、／実に足も揃り粉木も出で、／働く台所。大方支／度も整ふ頃は、はや夕／方になりけり。篠兎は／墓に詣でし歸りに／旦那寺の僧をともし／なひ、忙はしく立ち歸れば、／僧は持仏に打ち向かひ、木／魚もく／看經も一口／茄子で澄まし汁、靈供の／菜を数へるたり。沼田助／始め里人共五人七人／集ひ来て、暑し寒しの／義理言葉、また亡き人の／ことを言ひ出し「昨日か今日／と思ふ間に早くも／三十五日とは、本に／浮世は夢の内。／さくさゑもんにくは／ぎう、かま六、いづれも／お詰めなさらぬか」「しか／らば御免。イヤあまり／上座になつて不躰／千万」「遠慮する／のは昔風、何処でも／場代は同じこと、／お手を取

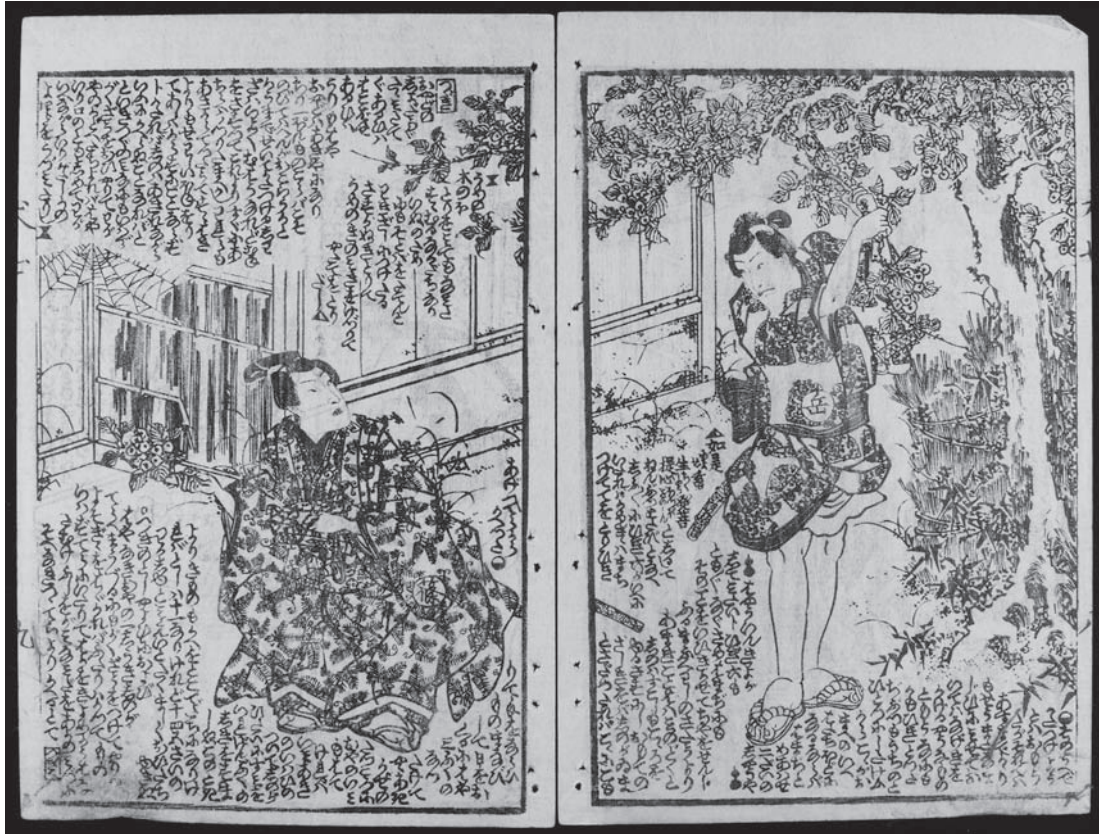


図版 10 七ウ、八オ

らうか」「こりや／迷惑。何を言ふより／仏には別懇」なりし／沼田／助殿、／お前／から／して／尻／込みは／こりや／我が／儘」と／口／く／わやく。／漸／座敷も／定まれば、／篠兎が手づ／から並ぶる／膳部、中／酒は気根／の銘／さか／づき。中蓋、／汁椀、片の／蓋。「ひらに御免」／と詫ぶるもあり、／油断を見澄／まし岳藏が／椀を奪うて／盛る飯は、鼻に●。●支へてまた胸に／支へぬために／と汁かけて、●●半分減らし／溜息をつぎ／の間より／上座の障／子引き／開け／出つる●●非義六は／「いづれも／揃うてよく／わたした。参る／ものはなければ／ども、寛いで／話さつしやれ」ト／手先を入れて引き／伸ばす、袴の襷も／角／し。／皆の／者は／箸を／置き、／「思ひ／がけなき」御馳走／に、十間／店の●●節句前、／菖蒲人／形の鎧／武者、伸び屈みさへ／ならぬほど大層に／下された」ト一人が／言へば、二人が笑ひ、わつと／噴き出す飯粒は、／膝より／膳へは／なふ／づき。●●「これは／／」と／吉野腕／抱へて拾ふも／またをかし。非義／六は見遣りもせず／『さて各／にも知らる、如く、●●／瓶さ、は／元の地／頭正／作殿／の／づきへ』

〔七ウー八オ〕

〔つぎ〕 姉娘。その家一旦断絶せしが、再興せしは／妻の縁によるとはいへど、我が手柄とは言はずとも承知／ならん。後磐作が帰りしかば、所領も引き分け役目／をも譲らんと思ふに甲斐なく、足を患ひ心さへ／僻みて姉を常に恨み、生涯此方へ訪れねば、／役目に対して此方より手を下げて行かれもせず。しかるに／各／彼を哀れみ、住宅田畑求め遣はし／養ひてやられしは、昔を忘れぬ実の至り。口へこそ／出ださねど、涙／くむまで忝なけれど礼を／言はぬも役目の悲しさ。少しは推量／せられよかし。さて片意地を立て通し／死を遂げし磐作が死後の迷ひは／篠兎が身の上。この孤児をやし／なひて人と為さずは先祖へ不孝。／我も人の道知らずと、妻と／語らひ心を添へ、我もおと／づれ下男等も遣はしおきて／等閑にせざりしも、承知／ならん。さて十五にも足らぬ子供／手放し置くも不便故、明日よりは我が家へ連れ行き天晴／男に育て上げ、娘破魔児を娶せて大須賀氏の／世継ぎとせん。さればかの磐作田は各／へ／返すべきか、また



図版 11 八ウ、九オ

篠兎に与へんか」ト問へば、各口を揃へ「親の物は子の物。我等へ●●返る筈はなし」ト言ふに非義六打ち領き、「さらば篠兎が成長するまで活券は我等へ預かるべし。またこの家は縁を外して磐作田の稲を納むる小屋にすべし」ト言ひければ、己が田へ引く水くさき仕業と知るか、各は早くも返事しかぬるを聞いて瓶ぎ、進み出で、「今日の仏はとまれかくまれ、篠兎は私が婿なり子なり。掛け替へのなき親身の甥に譲る田畑に目をかけて、何、せうと思はつしやる。明日からは●我が家の竈の下の灰までも、末には篠兎が物になる。篠兎もさう思ふがよい。●憎しと思ふた弟さへ亡くなつては涙の種。東を見ても西見ても伯母の他には身寄りの無いこの子の行末。おもしやれば二ツ三ツから育てあげた破魔見よりはむこうござる」ト零すなみだは庭竈、灰に埋まる焚き止しの煙りの力を借りたるなるべし。泣きたてられて鼻打ち擽み、里人齊しく打ち嘆き「親は泣き寄り、御新造の述懐が何より追善。篠兎殿を婿にするト仰るのが曲がらぬところ、何事を疑ひ申さう。●かの磐作田はお庄屋様御支配なさる、思召し、勿論に候ふ」ト答ふれば二人は落ち着き、猶様々に饗しつ。初夜過ぐる頃席収まり、僧は回向の阿耨多羅三藐ならぬ二百の布施、臍の辺りへ押し込みて立つ跡に付く百姓共、わやく帰り行く後は、潮の引いたる如くなり。次の日篠兎は父母の墓へ再び詣でしが、我が家を指して帰るところへ、岳藏は繩襦袢煤に汚れし額の汗拭ひく駆け来り、「御身が家を出でられし後へ、どろく主人夫婦大勢の僕を連れ行き、つぎへ

如是畜生

〔八ウ―九オ〕

つぎ／御宿の諸道具、畳、建具、あるひは運ばせあるひは売り、最早御宿は空き家になり塵一本も残らばこそ、延びては変が起こらうかと斯うまで急いで片付ける仕わざはいよ／無法なれど、胸を擦つてこれよりすぐにあ／ちらへ移り給へかし。我等も朝から手伝うて煤掃き／よりも忙しい骨折れ。手足は烏に異ならず」ト語れば、篠兎



図版 12 九ウ、十オ

は呆れながら言ふに返らぬ事なればと吐息つぐのみ何も言はず。岳藏を追ひ遣りて我が家の門へ立ち寄れば、はや入り口の戸も閉めて我が家ながら入り難し。かのよ四郎を埋みたりし●●梅の木ほとりを見て涙進む媒なり。犬のためにも卒塔婆を立てんと、脇差に付けたる刺刀抜き取りて梅の木を削りて矢立を取り出し●●如是畜生畜善提心記して念仏十度唱へ、洪く非義六が家に至れば、瓶ぎは待ちつけて手を取り引き上げ、寺から帰つた●●その上で片付けようとは思うたが、それでは明日までか、りもせう。またなまじひに見せておいては嘆きをかけるやうなもの、もう何もかも引き取つた。持仏も家のと一つにした。今日から此処がお前の家。二十歳ほどに、なるならば、破魔児と娶せ二代の庄屋。●●早う隠居がしてみたいト非義六もともぐ慰め、破魔児にもそのことを言ひ聞かせて茶を煎じ、振る舞ふ菓子砂糖より甘き言葉は身の毒と、篠兎は少しも心を許さず。西面の座敷をば篠兎が居間と定めれば、此処に籠もりて手を習ひ物学びして日をおくるに、はや三伏の夏、開けてや、秋風の立つ頃に親の忌みも果てければ、忌み明きの祝ひの序で、篠兎が額に角を入れ、元服の式を済ましぬ。この時より着物も替へ、男出立ちになりければ、年は十一なりけれど十四五歳の若衆と見え、いと逞しく生ひ立ちゆきぬ。○次の年弥生に及び、はや亡き親の一周忌、篠兎が寺へ詣づるにも岳藏を付けて遣りつ。余所聞、を憚れば、二人は嘗て物言はず。寺に至りて墓を清め、香花手向け伏し拝み、涙を閻伽の水に添へ、泣きつ、寺より帰るとつぎへ

〔九ウ—十オ〕

つぎ 我が古家の近くなるに、物を入れる、小屋にしたれば荒らすべきにはあらねども、人の住まねばその様の変はり果て、いと気疎し。二人は涙を浮かめつ、かの梅の木に寄りて見るに「如是畜生」の文字は消え、削りし痕も癒えて見えす。梅の実鈴の如し。この花は薄紅梅にてありければ、実の付くことも稀なりしに、「斯くまで多く実の生つたるは



図版 13 十ウ、原裏表紙見返し

今年が初めと訝れば、岳藏も熟く見て、「この梅の実はいづれも〳〵●八ツづ、固まり実りたり。八房といふ梅の越中にありと聞く。親鸞上人の墓にありて花一つにして、実は八つあり。その地をも八梅といふとは●」聞けど、見るは初めと言へば、「実に〳〵皆八つあり。●去／＼年までは常の梅、俄にこ／＼とし變じたるも不思議」と打ち眺め、「よ／＼四郎の執心ならば四つ房にこそなるべけれ。八ツづ、生るはまた怪し」ト枝引き振ていよく驚き、実一つに文字一つありくと据わつたり。「これは仁、これは義、これは礼、これは智、忠信、孝悌、八ツの文字いづれも〳〵備へたり。〳〵あら〳〵不思議」と顔見合はせ二人はぞつと怖げ立ち、「如是」●畜生の八ツの文字消えて、今、たこの文字の実についてあらはれたるは、こは〳〵如何」と言ひつ、も岳藏は守り袋に収めし玉を取り出だし、「この玉と〳〵この梅の実大／＼きさ少しも違はぬ上、文字のかた／＼もよく似たり。かならず故あることならん」と言ふに「我も」と篠兎もまた玉取り出だし比べ見て「実に寸分も違ひなし。玉といひ、梅といひ、深き故由あるならん。察するにこの玉も八ツありてこの如くしか〳〵の文字を備へ、それを持つ人猶六人この世の中にあるならん。その者必ず我〳〵に善悪縁ある人なるべし。問へども草木は物言はず、叩けど玉に声はなし。た〳〵後に思ひ合はせん。人は不思議を好むものなり。互ひに秘すべし、秘すべし」と頷き合うて、かの梅の実紙に包みて玉諸共守りぶく／＼に二人は収め、何気もなく帰りけるが、かの梅色むに從ひて文字は消えて見るものなけれど、八房の名は高くなりぬ。次の年より梅の実に文字は更に据わらねど、年〳〵に枝葉榮えつぎへ

〔十ウ〕

つぎいと多く実を結べば、非義六等は喜びて花を見るに、ろはなけれど、実を取れて塩に漬け利得の多きを喜ぶなりけり。○非義六は篠兎を呼び入れ、表には●世にねん／＼ころ／＼ぶりて



図版 14 七編上原裏表紙（色刷）七編下原表紙（色刷）

可愛き／者に／したりけり。「これは／我に油断をさせ／村雨丸を奪ひ／取らん計略なり」と／篠兎はよく知り、これも上辺は／伯父伯母御と如何にも親しく／仕ふれど心は少しも許さ／ねば、その始めより件の／太刀は寝ても覚めても身を離／さず。「怒に手を出して●仕損じ／なば、毛を吹いて大／疵を求めやせん。／急がば回れ。緩くと時節を待たん」と非義六等も盗み取る／念や、緩まり、その年も暮れ／何時しかに流る、年月定まねば、／文明九年に早なりて、篠兎は今年●●十八歳。破魔／兎は二八の春／の花、／朧／月夜に／咲き／初めて、／緑／●●整ふ／青柳の／霞の／隙に／靡くよそ／ほひ／三の巻へ

仙果鈔録
豊國画圖

〔原裏表紙見返し〕

家寶母散 さんぜんさんご／婦人ちのみち／一切の妙やく

中橋／南傳馬町一丁目東側千葉堂孝輔製

私方実母さん之義 中ばし南でんま町一丁目西がはにて 年來賣弘來り候処

店手ぜまに付 此度同所／向東がはへ引うつり申候間 猶相かはらす御用向

奉願上候

御免疝積湯 せんしやくつかへによし

せんきの妙薬

御用薬所 信州上田東山堂製

無るい／えりおしろいばつちり 一包／四十八銅
無るい／ながしおしろいさくら香 一包／廿四銅

大日本國郡輿地全圖 大森書 府郷御江戸繪圖 六枚綴
御おしろい せんきの薬 取次所 繪草紙問屋 江戸南傳馬町一丁目 葛屋吉藏

登場人物一覧 (七編上)

次に『雪梅芳譚犬の草紙』七編上の登場人物名をかけた(読み仮名・漢字とも表記は原文のまま)、その下の【】に、相当する『南総里見八犬伝』の登場人物(その他)の名を示す。

犬須賀磐作一戌【犬塚番作一戌】

篠兎の父。自らの不自由な身体や篠兎の将来を憂い、亡父大須賀正作参戌から譲り受けた亡君持氏【足利持氏】の宝刀村雨丸【村雨】を篠兎に託して自害した。会話にのみ登場。

大須賀正作参戌【犬塚匠作二戌】

持氏の家臣で、持氏の遺児、春王・安王の傳。盤作・瓶ざゝの父。春王・安王が、室町幕府の將軍のもとに護送される途中処刑されたので、その仇を取ろうとするが討たれた。生前、主君から預かった宝刀村雨丸を子の盤作に託していた。会話にのみ登場。

犬須賀篠兎【犬塚信乃】

磐作の子。磐作の死後、非義六夫婦に引き取られることとなった。十一歳で元服する。

岳藏【額藏】

非義六の下僕。篠兎と兄弟の義を結ぶが、非義六夫婦を欺くため仲の悪いふりをする。

沼田助【糠助】

大須賀村【犬塚村】の百姓。磐作の三十五日の速夜に、他の里人さくざゝゑもん、くはざう、かま六【鎌平】と共に供養に訪れる。

大須賀非義六【犬塚墓六】

大須賀村の村長。旧姓はや、山【彌々山】であるが、瓶ざゝに婿入りして大須賀姓となった。磐作の死後、周りの目を気にして篠兎を養育することにした。

瓶ざゝ、【龜篠】

磐作の異腹の姉で篠兎の伯母。

湍すけ【背介】

非義六の老僕。

破魔児【濱路】

非義六、瓶ざゝの養女。会話にのみ登場。

青地鱧二郎【網乾左母二郎】

挿絵にのみ登場。

